

(様式 2)

---

[成果情報名] 福岡県の水田内におけるイネカメムシの発生推移と薬剤による防除効果  
[要約] イネカメムシの成虫は、成熟の早い品種・作型の水田に出穂期前後から順次侵入して産卵し、ふ化した幼虫は1か月程度で次世代成虫になる。出穂期14日後の薬剤散布はイネカメムシの斑点米抑制効果が高い。一部地域ではエチプロール水和剤の感受性が低い。  
[キーワード] 水稲、イネカメムシ、発生消長、防除、薬剤  
[担当部署] 病害虫部；病害虫チーム  
[連絡先] 092-924-2938  
[対象項目] 水稲                      [専門項目] 病害虫                      [成果分類] 技術改良

---

[背景・ねらい]

イネカメムシは2021年以降福岡県の一部地域で増加傾向にあり、斑点米による品質低下が問題となっている。本県におけるイネカメムシの発生実態は明らかになっておらず、本種の防除に有効な薬剤や防除時期の報告例は少ない。そこで、イネカメムシの発生実態を明らかにするとともに本種の斑点米被害抑制に有効な薬剤および防除時期を検討し、イネカメムシの防除対策を確立する。

(要望機関名：京築普 (R3)、JA全農ふくれん、JA福岡中央会、八幡農林、北九州普 (R4))

[成果の内容・特徴]

1. イネカメムシの成虫は、7月中旬頃から成熟の早い品種・作型の水田に出穂期前後から順次侵入して産卵する。ふ化した幼虫は、1か月程度で次世代成虫になる。また、本種は主に年2世代発生していると考えられる(表1)。
2. 福岡県内に分布するイネカメムシは、一部の地域(個体群)でエチプロール水和剤の感受性が特異的に低い(表2)。
3. 出穂期14日後の薬剤散布は、出穂期や出穂期7日後に比べてイネカメムシによる斑点米の抑制効果が高い傾向がある(図1)。
4. イネカメムシに対するジノテフラン液剤の防除効果は高い。スルホキサフロル水和剤は一定の防除効果があるものの、ジノテフラン液剤と比較してその程度は低い(図2、一部データ略)。

[成果の活用面・留意点]

1. 水稲における病害虫防除対策の資料として防除の手引きに掲載して活用する。
2. エチプロール水和剤は、現在感受性の高い地域においても今後感受性の低下が懸念されることから感受性の動向に注意する。
3. イネカメムシは不稔被害を引き起こすことがあり、本種による斑点米被害に加え不稔被害の抑制を目的とした場合には、出穂期とその14日後の薬剤散布を組合せた体系防除を実施する。

[具体的データ]

表1 イネカメムシの成虫・幼虫の捕獲数の推移（令和4年）

水田		イネカメムシ捕獲数（すくい取り・片振り20回×2か所合計）									
		7/上	7/中	7/下	8/上	8/中	8/下	9/上	9/中	9/下	10/上
A 早期	成虫	2	305	8	20	9					
	老齢	0	0	5	172	1					
	中齢	0	0	69	139	0					
	若齢	0	11	187	1	0					
B 普通期 (早生)	成虫		0	0	0	0	39	3	0		
	老齢		0	0	0	0	0	2	14		
	中齢		0	0	0	0	0	18	10		
	若齢		0	0	2	0	0	3	0		
C 普通期 (晩生)	成虫			0	0	0	6	56	3	53	143
	老齢			0	0	0	0	0	20	67	85
	中齢			0	0	0	0	0	66	85	22
	若齢			0	6	0	2	14	11	0	0

注) 1. 表中の矢印は出穂期を迎えた期間、網掛けは調査日におけるイネカメムシの主要な生育ステージを示す。空欄は未調査。

2. 品種：圃場A（夢つくし）、圃場B（元気つくし）、圃場C（ミズホチカラ）、調査地域：築上町

表2 異なる地域のイネカメムシに対する数種薬剤の感受性（令和4～6年）

一般名 (IRACコード)	濃度	処理4日後における補正死虫率 (%)										
		(採集地) 築上町①	築上町②	筑紫野市	芦屋町	嘉麻市	添田町	糸島市①	糸島市②	久山町	久留米市	大刀洗町
エチプロール水和剤 (2B)	1000倍	6.9	0	0	0	20.7	37.0	87.5	92.9	90.5	100	96.3
ジノテフラン液剤 (4A)	1000倍	-	-	100	-	100	-	-	-	-	100	-
スルホキサフロル水和剤 (4C)	2000倍	100	100	95.5	-	100	-	-	100	-	100	100

注) 1. 成虫を用いた虫体浸漬法（薬液に5秒間浸漬）により実施。

2. 16～30頭供試。

3. 表中の「-」は未調査。

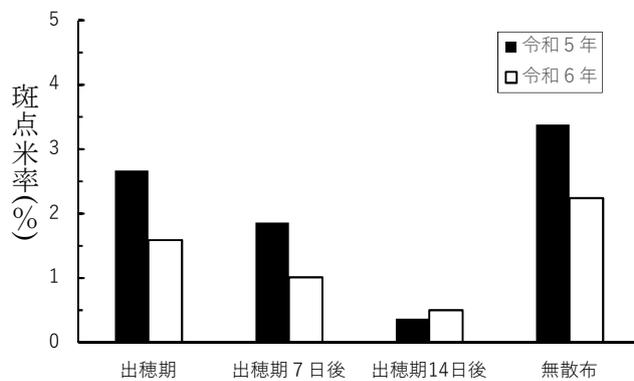


図1 散布時期の違いがイネカメムシによる斑点米の発生に及ぼす影響（令和5～6年）

注) 1. 供試薬剤：スルホキサフロル水和剤（2000倍）

2. 斑点米率は精玄米を用いて算出。

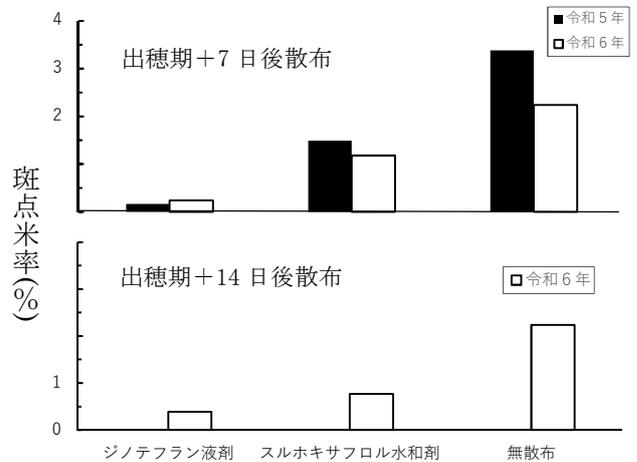


図2 散布薬剤の違いがイネカメムシによる斑点米の発生に及ぼす影響（令和5～6年）

注) 1. 出穂期0+14日後散布は令和5年未調査。

2. 斑点米率は精玄米を用いて算出。

[その他]

研究課題名：イネカメムシの発生実態の解明と防除対策の確立

予算区分：経常

研究期間：令和6年度（令和4～6年）

研究担当者：海口直弥、清水信孝、上村香菜子、伊丹春衣